

『釋淨土群疑論』における指方立相淨土批判に対する二方向の反駁

村上真瑞

以前、拙論『釋淨土群疑論の研究』⁽¹⁾において、『大乘苑義林章』において、善導の指方立相に対する批判が展開されていることに注目して、『釋淨土群疑論』における淨土の三界撰不撰論を展開した。

では『大乘法苑義林章』の主張を再考してみよう。卷第七末、佛土章によると、

第六^ニ處所^ト者其法性^ノ土^ハ卽眞如^ノ理^ニ。無^ニ別^ノ處所^一。自受用^ノ土^ハ亦充^ミチテ^ニ法界^ニ一^ニ。更^ニ無^ニ別^ノ處^一。佗受用^ノ土^ハ佛地經^ニ言。超^レ過^ス三界^所行^之處^一。彼論^ニ釋^ソ言^ク。非^ガ三界^ノ愛^ヲ所^ニ執受^{スル}一^故。離^{タル}ラ^ニ相應^ト所縁^ト二^縛隨増^{スル}ラ^一言^フ二^超過^ス三界^ト一^故。故^ニ是^レ道諦^ニ善性^ノ所攝^ス。彼^ニ有^ニ三^釋一^故。有^義ハ各別^ニ有^處ニ^ハ說^レ在^ト淨居天上^ニ一^有處^ニハ說^ガレ^在ト^ニ西方等^ニ一^故。有^義ハ同處^ニ。淨土ノ周圍ノ無^レ有^ニ二^{邊際}一^故。遍^スガ^ニ法界^ニ一^故。如^實ノ義^ハ者自受用^ノ土^ハ周^レ遍^ス法界^ニ一^無二^處ト^ソ不^レ有^ニ。不^レ可^三說^テ言^ニ離^三界處^トモ^一。卽^三界處^トモ^一。若^シ佗受用^ノ土^ハ或^ハ在^ニ色界^ノ淨居天上^ニ一^或ハ西方等^ニ處所不定^ス。法華^ニ亦^タ言。衆生見^ニ劫盡^テ大火^ニ所^ト燒^レ時^ニ我此土^ハ安穩^ニ天人常^ニ充滿^{セリ}ト。十地^ノ所見^ハ乃^チ是^レ報土^ニ地前^ノ所見^ハ乃^チ是^レ化土^ニ。隨^レ宜^ニ而現^ス。何^ゾ得^シヤ^三定^レ方^ヲ別^ソ指^クラ^一ニ^一處^ヲ一^欲ソ^レ令^ト三^衆生^ヲ起^サ二^勝タル^欣心^ヲ一^別ニ^指ス^二處所^ヲ一^隨テ^ニ心淨處^ニ一^卽淨土^ノ處^ニ。化土^ハ必^ズ隨^テニ^三界^ノ處所^ニ任^テレ^レ物^ニ化^{スル}ニ^生ヲ^卽現^スル^ガ故^ニ。古人於^テ此^ニ種種^ニ分別^ス。三界之外^ニ別^ニ有^ニ一^處所^一以爲^ニ淨土^ト一^理必^ズ不^レ爾^ラ。所化^ハ必^ズ有^ニ

異熟識在^一。異熟識在^ハ必^ズ是^レ三界ノ攝^ク。何^ソ得^{シヤ}レ出^ヲレ界^ヲ。土非^ハ二界繫^ニ一^レ言^レ超^ト三界^ヲ。非^ニ處^ニ別隨^ガ所化^ニ故^ニ。⁽²⁾

と説かれるように、法性土は真如の理であり、自受用土は法界に充ちているから、特に決められた場所はないのであるが、他受用身については、『佛地經』において、三界に形成された場所を超えたものである、と説かれる箇所を引用してそれを三方面から解釈するが、その中、「如実の義」として、次の解釈を示している。十地の菩薩が見れば報土となり、地前の菩薩が見れば化土となる。それぞれの心に随ってそれぞれの心に浄土が現れるのであるから、方向を定めて、一つの場所を特別に定めることはできない。として、まさに善導の指方立相に対する論難がなされている。そして、そのような指方立相は、衆生に浄土へのあこがれの心を起こさせるために、特別に定めただけのことであって、本来は、心の浄らかな状態によって、それぞれの浄土の浄らかなのである。だから凡夫の変現するような化土は、三界の迷いの世界の物に心を至して変現するのであるから三界摂以外の何ものでもない。にもかかわらず古人は、この三界摂の浄土に理屈をつけて、三界の外に特別にある場所だと述べる。しかし、道理に従うならば、凡夫によって変現された浄土には、必ず清浄智に転じられていない異熟識（阿頼耶識）が存在する。異熟識が残っている心は、三界の摂に他ならない。決して三界を出過しているはいえない。三界のあらゆる煩惱から解放されてこそ三界を超えたといえるのである。よって、指方立相のように、浄土という場所が特別にあるのではなく、変現された心に随って浄土はあらわれるのである。と示されるように、基は、厳しく浄土教の指方立相に対して論難を加えている。

概説するならば、『釋淨土群疑論』では詳細に三界不摂を説明し、前述の基の『大乘法苑義林章』の説を否定する型式を用いて論じている。これらの『釋淨土群疑論』と『大乘法苑義林章』との論争の二々については、割愛して、ここでは、その中の重要な問題の一つだけとりあげたい。すなわち、前述のように『大乘法苑義林章』では、浄土とは、その

人の心の浄らかな様子に従って浄土も浄らかなものとなるのであるから、凡夫の変現するような化土は三界の迷いの世界の物に心を執著して変現するのであるから三界撰以外の何ものでもない。と説くのである。それに対して懐感^{ハクカン}は、凡夫は物に心を執著する以外救われる道がないことと、浄土自身に具わる阿弥陀佛の本願他力の力用とをふまえて、『大乘法苑義林章』の説を否定している。すなわち『釋淨土群疑論』卷第一においては、

託スルヲ以^レニ如來ノ無漏ノ淨土ニ一雖下以^レニ有漏心ヲ一現^スト中其淨土ヲ上而^モ此淨土ハ從^テニ本性相ノ土ニ一土亦非^レレバニ縁縛相應縛ノ縛スルニ一不^ルレ増^スニ煩惱ヲ一如ク下有漏心ノ縁スレ^ハニ滅道諦ヲ一煩惱不^ルガ増^ス猶如シ下觀^ルニ日輪ヲ一損^ス中減スルガ眼根ヲ上也。故^ニ非^ニ三界ニ一非^レレバニ三界繫ノ煩惱ノ増^スルニ一也。⁽⁴⁾

と指摘しているように、如來の無漏の浄土に依託して、有漏心の浄土を現するが、しかし凡夫の現する浄土は無漏の如來の本質、形相をもつ国土に依拠している限り、煩惱による所縁縛と相應縛とがないから煩惱の増加することもないわけである。それはあたかも無漏である滅道諦を有漏心が縁しても煩惱が増加しないのに等しい。懐感はこのことについて太陽を凝視した場合、眼根のはたらきが著しく失われるという譬喩によって、三界繫縛の煩惱が増加しないから三界ではないと判断している。この譬喩は眼根が太陽を見たならば、その光の作用を受けて目がくらみ、眼根と眼識という機能に障碍を与えることを示している。したがってこの譬喩は日常経験から得られた譬喩であり、所縁が能縁におよぼすはたらきを取りあげている。このことは唯識無境を説く法相の教理とは異り、対境（如來無漏土）のはたらきを取りあげられていることは、能縁（凡夫自心）の否定に伴って所縁（所變の土）をも否定し、能縁・所縁という相對を越えしめることを意味している。これは唯識教學の勝義諦である境識俱泯の立場に近いものと考えることができる。よってこれは、太陽を如來無漏の浄土にたとえ、眼根を煩惱の繫縛にたとえていえると言えよう。つまり如來無漏の浄土を凝視することによって、かえって凝視するという執着が損なわれ、煩惱の繫縛から放たれると言うのである。したがって

この問題は、如来無漏の浄土との関係であり、如来無漏の土に具わる力用には、凡夫所変の有漏土に作用することによって、凡夫所変の有漏土を清浄化するという増長縁的な作用を見出すことができる。ここにおいて無漏土に具わる力用によつて、凡夫の浄土に対する執著（有漏心）がそこなわれ、繫縛から放たれるという、いわゆる執著をもつて執著が遣られるという内容が示されていることに注目させられる。このことは前述のように、懷感が凡夫所変の浄土は有漏土であると前置きして種々の論を展開している意を理解する一つの糸口となる。つまり懷感の三界不摂論における真意とは、清浄なる浄土への強い執著＝煩惱＝有漏心こそ本願力の増長縁をうける前提となることである。だから、煩惱具足の凡夫・有漏の依身に過ぎない凡夫が阿弥陀佛の無漏の浄土に往生する道は、自身に具わる有漏心執著心を置いてないわけである。では、このような煩惱＝有漏心を肯定しようとする思想の背景はどこに求められるであろうか、曇鸞（A.D.四七六―五四二）の『無量壽經論註』巻下に説かれる見生往生の譬喩をあげることができると思う。すなわち、

如シニ氷ノ上ニ然クニ火ヲ火猛トキハ則氷解ク。氷解トキハ則火滅スルガ。彼ノ下品ノ人雖レ不トレ知ラニ法性無生ヲ一。但以下稱スルニ佛名ヲ一力ヲ上作ニ往生ノ意ヲ一願スレバ生セントニ彼ノ土ニ一。彼ノ土ハ是レ無生ノ界ナレバ見生ノ之火自然ニ而滅ス。⁽⁵⁾

と説かれるように氷の上で火をたけば、火がはげしく燃えれば燃えるほど氷がとけて、氷がとければ水になつてはげしく燃えていた火を自然に消すように、下品の人は法性無生の悟りなどまったく知らないが、ただ佛名を口で称える力によつて往生しようという意志をもつて、彼の西方浄土へ往生したいと願すれば、彼の浄土は無生の悟りへの世界であるから、見生の火は自然に消えるものであると示される。ここで注意したいのは、氷の上において、すなわち浄土にすべてを託して、浄土に生まれたいと執著する煩惱の火がはげしく燃えれば燃えるほど、氷がとけてその火を自然に消して、見生を無生に転ずるといふ考え方である。まさに、この考え方は、『釋淨土群疑論』において、有漏の煩惱を肯定し、その執著の心によつて、太陽（如来の無漏土）に眼を凝らせば、かえつてその光の作用によつて眼根がそこなわれ、自

然に執着の心が清浄化され、煩惱は増加しない、という主張とその表現こそ異なるが同じものである。したがって懷感が日輪によって眼根を損滅されるという譬喩を用いた背景には、曇鸞以来の中国浄土教家の伝統的な浄土の土徳に対する考え方があったということを忘れてはならない。

今回は、『釋淨土群疑論』巻第一に於いて、浄土の第一義諦俗諦二諦説を展開して、再度、指方立相に対する批判を反駁しているので、その論理の思想背景を探ってみたい。基の主張に対して懷感は、『釋淨土群疑論』巻第一に於いて第一義諦俗諦二諦説を展開して反論を展開している。詳細については、割愛するが、先ず『釋淨土群疑論』巻第一に於いて以空空等又言菩薩云何觀於衆生維摩詰言如第五大第六陰第七情十三入十九界等法法花経言諸法法從本來常自寂滅相般若經言如來說莊嚴佛土者即非莊嚴又言實无衆生得滅度者⁽⁶⁾

と説かれるように、『般若経』等に説かれる空の思想を基にした、因縁仮和合であるがゆえに不変の存在を否定する第一義諦の立場を説明している。続いて、

如是等諸大乘經究竟了教咸言諸法空寂何因今日説有西方淨土爲所生之土衆生爲能生之人勸人著相起行依不了義經此乃不得諸佛深義取著有相不名習學大乘法也⁽⁷⁾

「すでに示したような諸大乘經の究極の完全な教えの中にすべて諸々の存在は実体性がなく空無であると言っている。どのような理由で今日西方に極樂浄土が有ると説いて生ぜしめられるところの国土とし、生きとし生けるものを生まれていくことが出来る人として、人に極樂往生を勧めて外に現われている姿に執著して修行をなして不完全な經典に帰依させるのであろうか。このことはいうならば、諸佛の深い道理を理解せず、現象のすがたに執着している。これは大乘仏教の教義を学習していると言うことはできない。」と説かれるように、第一義諦の究極の空思想に立脚するならば、浄土教は現象の姿に執着する不完全な教えではないのか。という問いを發する。それに対して、

釋曰如向所說大乘空義究竟了教深生敬信不敢誹謗究竟出離二種生死斷人法執證大涅槃唯此一門更无二路小行菩薩二乘凡夫修菩薩行欲求佛果未證无生法忍不免退轉輪廻非无種種法門句義依之修學修求出世如何所引諸大乘經說畢竟空破人法相唯此等教是真佛說⁽⁸⁾

と説かれるように、究極の第一義諦のみが佛説であろうか。と疑問を投げかける。そして、

今觀經等所說西方淨佛國土勸諸衆生往生其國此亦是於眞佛言教既俱佛說並爲眞語何爲將彼空經難斯淨教信彼謗此豈成理也然佛說法不離二諦一俗諦二第一義諦俗諦是因緣生法依他起性非有似有第一義諦是无相眞法圓成實性諸聖內證妙有眞有然其二諦非一非異以眞統俗无俗不眞即一切諸法皆歸寂滅若不以眞攝俗即一切諸法緣會故有緣離故无无法宛然不可言无也⁽⁹⁾

「今『觀無量壽經』⁽¹⁰⁾等に説くところの、西方の極樂淨土に諸の衆生よ、その極樂淨土に往き生まれよと勸めること、これもまた眞実の仏の言語によつて示された教えである。すでに（前述の大乘教と）ともに佛説であり、どちらも仏の眞実のことばである。どのようにして前述の空を説くあの大乘教をとつて、この淨土教の非を責めることができようか。いやできない。あの大乘教を信じ、この淨土教をそしるならばどうして道理を完成することができようか。いやできない。しかし佛の説法は二つの眞理を離れることはない。一には世俗の立場での眞理であり、二にはすぐれたさとの智慧を極めた境地である。世俗の立場での眞理は、本来実有のものでなくみな因と縁とで結び合わされて、仮に生じているの存在であり、因縁和合によつて生じ、因縁が無くなれば滅するものである。存在しないものであつて、かつ存在に似ている。究極の眞理は形や姿を持たない眞理であり、ありとあらゆるものの眞実の本性である。諸の無漏の智慧を起こした聖者の内面的なさと、絶対の有であり眞実の有である。しかしその（眞・俗）二つの眞理は一つでもなく異なつてもいない。究極の眞理によつて世俗の眞理をひとすじにまとめると、世俗の眞理として究極の眞理でないものはない。

とりもなおさずすべての諸の存在は皆な寂靜に歸して、一切の相を離れる。仮に究極の真理によって世俗の真理を納めることができなければ、とりもなおさずすべての諸の存在は、あらゆる条件が出会うが故に存在するし、あらゆる条件が離れるが故に存在することができなくなるのである。すべて存在がちようどそのままである。何もないと言つてはならない。」と説かれるように、因縁仮和合の世俗の立場の真理を認めなければ、世間の現象界が成り立たない。第一義諦と世俗諦との関係は不一不異のものである。と答え統いて、

佛或破衆生相令歸无相欲除人法二執見修兩惑偏明第一義諦說一切皆空欲令衆生捨凡成聖斷惡修善欲求淨土厭離穢土具說種種法門因果差別凡聖兩位淨穢二土⁽¹¹⁾

と説かれるように、佛は、人法二執、見惑修惑を除かんが為に第一義諦一切皆空を説き、凡夫衆生をすべて引接したいとするときは、差別的な種々の俗諦を説いた。と説明を続ける。

今遣捨穢歸淨隔凡成聖即於此門中說種種諸法皆爲成就佛法利益衆生化宜方便逗機善巧理宜如此故教有二門也不可讀第一義諦之經畢竟无相之理即謂淨土因果等教將非是佛眞言不爲究竟之說便謗而失信也⁽¹²⁾

と説かれるように、第一義諦のみを信じて、淨土の因果關係を明らかにするなどの教は、佛の眞實のことばではないと言つて、輕視して信じないということをしてはならない。と示し、また

不可讀種種因果差別言教不信說一切空寂甚深般若波羅蜜多无相玄宗便毀而不持也⁽¹³⁾

と説かれるように、逆に世俗の差別諦である淨土の因果關係を明らかにするのみを信じて、第一義諦の空の思想を輕視して信じないということをしてはならない。と示す。

此即於諸大乘經三藏聖教有讚有毀懷疑懷信亦修善法亦造重罪信不具足名一闡提如十輪經具明其罪可須俱生敬信善會二宗旨趣也⁽¹⁴⁾

と説かれるように、両者とも互いに敬い信ずる心を起こしてよく第一義諦と因果差別の二つの宗の考え方を統合すべきである。と示す。

又言雖知諸佛國及與衆生空而常修淨土教化於羣生上兩句第一義諦下兩句世諦大品經等說内外空等第一義諦也而言淨佛國土教化衆生世諦也⁽¹⁵⁾

と説かれるように、『維摩經』に説く「諸佛の國及び衆生と空である」という第一義諦と「常に淨土に往生するための行を修行して人びとを教え導く」という世俗諦とが一体である。

如是等衆多大乘言教皆說畢竟空寂法門即言淨佛國土教化衆生子須具讀經文上下參綜自相和會除其信謗之心爲人宣說勿有讚毀之語此即自利利他同得離苦解脫而乃披尋聖教文義不同自信不具毀陷其身令他聽徒成闡提業自損損他也⁽¹⁶⁾

と説かれるように、第一義諦と世俗諦の調和こそが大乗菩薩道にとって大切であると説く。

上記の『釋淨土群疑論』の第一義諦と世俗諦との調和を述べるその背景について曇鸞の『無量壽經論註』に説かれる法性法身、方便法身に着眼して考察してみたい。

入第一義諦者彼無量壽仏国土莊嚴第一義諦妙境界相十六句及一句次第説応知第一義諦者仏因縁法也此諦是境界是故莊嚴等十六句稱為妙境界相此義至入一法句文当更解釈⁽¹⁷⁾

入第一義諦（さとり）の智慧を極めた境地に入る）とは、彼の無量壽仏の国土の嚴かに飾られた模様は、さとり）の智慧を極めた境地（清淨功德）の見事な美しい対象であるということである。十六の意味を表しうる文章と及び（究極の）一つの意味を表しうる文章と順序をもつて説く。当然知るべきである。ここでいう第一義諦とは仏の説く縁起の理法である。ここでいう諦とは対象の意味である。このような訳で嚴かに飾られた模様等の十六の意味を表しうる文章を称して見事な美しい対象の形とする。この道理は、入一法句（の文の説明）に至って当然更に解釈するであろう。と説かれ

るように、無量寿仏の国土の莊嚴に於いて、第一義諦という姿をもたない真理と、妙境界相という姿を有した相反する二面から取り上げている。

つぎに、『無量壽經論註』卷下において、

略説入一法句故上国土莊嚴十七句如来莊嚴八句菩薩莊嚴四句為広入一法句為略何故示現広略相入諸仏菩薩有二種法身一者法性法身二者方便法身由法性法身生方便法身由方便法身出法性法身此二法身異而不可分一而不可同是故広略相入統以法名菩薩若不知広略相入則不能自利利他¹⁸⁾

と説かれるように、第一義諦であり姿を有さない一法句を略とし、具体的な姿を有する二十九種の莊嚴を広と表して、広と略との互いに相い入ることを説く。そして、二種法身として、法性法身（第一義諦・一法句）と方便法身（二十九種莊嚴）とをあげて、二者の広略相入を示している。

続いて、『無量壽經論註』卷下において、

一法句者謂清淨句清淨句者謂真實智慧無為法身故此三句展轉相入依何義名之為法以清淨故依何義名為清淨以真實智慧無為法身故真實智慧者実相智慧也実相無相故真智無知也無為法身者法性身也法性寂滅故法身無相也無相故能無不相是故相好莊嚴即法身也無知故能無不知是故一切種智即真實智慧也以真実而目智慧明智非作非非作也以無為而標法身明法身非色非非色也非于非者豈非非之能是乎蓋無非之曰是也自是無待復非是也非是非非百非之所不喩是故言清淨句清淨句者謂真實智慧無為法身也¹⁹⁾

と説かれるように、即非の論理によつて、「真智は無知」「無相なるが故に能く相ならざることなし」「相好莊嚴は即ち法身なり」「無知なるが故に能く知らざることなし」「智慧の作に非ず、非作に非ざること」「法身の色に非ず非色に非ざること」などの言い回しによつて、百非の否定だけにとどまらない真理を清淨句という肯定的な表現によつて表している。

る。つまり、極楽浄土の清浄なる具体的な相を有する莊嚴が、そのまま、第一義諦であり相を有することのない真実無為法身であると導いている。

以上、『釋浄土群疑論』において、第一義諦と世俗諦との調和を説いているところの浄土教の哲学的原理の原点を『無量壽經論註』の中に見いだすことができる。『大乘法苑義林章』において、基が展開した指方立相批判は、一つは、凡夫の顕現する浄土の三界不摂論に於いて反駁し、二つには、懐感の第一義諦と世俗諦との調和という論法に於いて反駁している。その背景にある論理は、奇しくもどちらも曇鸞の『無量壽經論註』に展開された、見生往生の譬喩であり、法性法身、方便法身の論であった。中国浄土教の哲学的骨格を形成する曇鸞の『無量壽經論註』は、『釋浄土群疑論』においてもその思想的背景を形成していることが証明されるものであることが明らかとなった。

註

- (1) 『釋浄土群疑論の研究』一八八頁
- (2) 安永九年三月校正改点洛陽書林開版十一丁〜十三丁
- (3) 古人とは曇鸞、道悼、善導、などの浄土教の諸師を指すものと考えられる。
- (4) 『釋浄土群疑論』寶永版一卷十三帖
- (5) 『大正藏經』一一卷二七四頁b
- (6) 『釋浄土群疑論』寶永版一卷二十五帖
- (7) 『釋浄土群疑論』寶永版一卷二十五帖
- (8) 『釋浄土群疑論』寶永版一卷二十五〜二十六帖
- (9) 『釋浄土群疑論』寶永版一卷二十六帖
- (10) 『觀無量壽經』『浄土宗全書』一卷三八頁

- (11) 『釋淨土群疑論』 寶永版一卷二十六帖
- (12) 『釋淨土群疑論』 寶永版一卷二十六帖、二十七帖
- (13) 『釋淨土群疑論』 寶永版一卷二十七帖
- (14) 『釋淨土群疑論』 寶永版一卷二十七帖
- (15) 『釋淨土群疑論』 寶永版一卷二十八帖
- (16) 『釋淨土群疑論』 寶永版一卷二十八帖
- (17) 『無量壽經論註』 卷下『淨土宗全書』 一卷二四四頁b、二四五頁a
- (18) 『無量壽經論註』 卷下『淨土宗全書』 一卷二五〇頁a、b
- (19) 『無量壽經論註』 卷下『淨土宗全書』 一卷二五〇頁b

キーワード 群疑論 指方立相 法相 論註

(むらかみ しんずい 東海学園大学共生文化研究所 研究員)